初等教育コース（小学校サブコース）、キャリア形成支援の教育臨床学

地域の学校における実践事例の蓄積と教材化に向けて

尾川満宏（教育臨床講座）

１．授業の基本情報・概要とこれまでの課題

本報告でとりあげる「キャリア形成支援の教育臨床学」は、2017 年度より初等教育コース小学校サブコース科目として開講されている。2017 年度は、2 回生 12 名と、4 回生 1 名が履修した。比較的受講者の少ない本科目は、筆者の研究上の専門分野をもとに、必修の教職科目に比べるとよりアカデミックな視点から子ども支援や若者支援、キャリア教育のあり方について議論している。

本科目は、主に中等教育段階を中心としたキャリア教育や学校内外における若者向けキャリア形成支援事業の現状、それらを方向づけている今日の若者政策などを扱っている。授業序盤は、日本における進路問題や就職問題の歴史や現状を、中盤は、現代社会におけるキャリア形成の困難について多面的に概説・考察した。終盤では、小学校におけるキャリア学習の実践事例を分析しながら、講義内容をふまえて受講者自身がキャリア教育実践プログラムの開発を行った。

このプログラム開発では、固定グループによるプログラム開発とその発表、そして相互評価を行っている。相互評価は、期末成績評価に少しだけ反映させる（５%程度）。発表と同時に評価を行わせることには２つの理由がある。１つは、受講者の視点を「評価される側の児童生徒（学生）」から、「評価する側の教師」に転換させることである。いま１つは、授業者である私だけではなく受講生同士による多様な評価結果を各グループにフィードバックすることで、自分たちの開発したプログラムの内容や発表方法のクオリティを省察する材料にできることである。２回生前学期の授業であるため、教育プログラムの開発やプレゼンテーションに不慣れな学生が少なくないが、指導案の作成や自分たちの考察を表現する「はじめの一歩」として、カリキュラム全体のなかで位置付けている。

2015 年度にはじめて担当した本科目では、受講者に対して授業後アンケートを実施した。それによれば、授業終了時点で「子ども・若者に対する学校内あるいは学校外でのキャリア形成支援について、関心が高まった」に「あてはまる」と回答した学生が多数であった。しかしながら、「子ども・若者に対する学校内あるいは学校外でのキャリア形成支援について、具体的に実践を構想できた」という項目への肯定的回答が、上記の関心の高まりを考えると、必ずしも芳しいとはいえなかった。このことから、学生の関心の高まりを、教育実践上の課題や問題に対する具体的な考察につなげていくための工夫が必要と思われた。

以上をふまえて 2016 年度、2017 年度を通じて行った授業改善について評価したい。

２．授業改善とその自己評価

上記の課題をもとに、ここ数年の改善点をいくつか記しておきたい。

2016 年度以降、実際にキャリア学習をテーマとした教育学部附属小学校の研究授業資料を用いて、より実践場面を意識できる教材を作成した。これにより、キャリア学習授業の目標設定や指導案の計画方法等の実践的スキルを身につけられると同時に、実践構想に向かう意欲を高められたと考えている。たとえば、2016 年では、授業最後の教育プログラム発表の質が、全体的に 2015 年度に比べて高まったと感じられた。

さらに 2017 年度は、授業内のディスカッションをより多く取り入れよるよう、授業方法に大幅な修正を行った。具体的には、私が執筆した論文等の通読を授業外学習とし、授業では学生とともに批評、感想を述べ合うという取り組みを数回行った。論文理解にはかなりの困難が生じたが、授業者が強調する観点の理解が促進され、2016 年度までとは明らかに異なるレベルで授業理解が進んでいると感じられた。その根拠として、教育プログラム開発テーマ案の質が大きく変化し、より重要

な論点にアプローチしようとしていることが挙げられるだろう（図１参照）。

他方で、授業外学習の時間や課題以外での読書数などは、十分というには心許ない結果であった。また、教育プログラム開発の質的なクオリティについて、提出された最終課題や報告の評価を行うなかでグループや個人に大きな差が観察された。差が生じることは必ずしも問題ではないが、個々の受講者が自己の学習課題をどの程度明確化できたかについて、今後も注意深く観察していく必要があろう。

３．地域社会を核とした教育と研究のつながり：実践事例の教材化に向けて

「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について本科目の事例から迫ってみたい。ここで考える「教育」とは、大学における学生に対する授業や指導の効果ないし影響を指している。結論的には、本科目の主題において、地域の学校と共同研究を推進しなければ、大学授業における実践的効果も向上しづらいと感じている。

前述のように、2016 年度、2017 年度には、附属小学校におけるキャリア学習の実践事例を教材化して、プログラム開発のひとつの指針を示すよう努めた。地域社会、というにはやや狭いが、附属学校園との連携を大学授業に還元することができた。しかしながら、本科目が焦点を当てる学校でのキャリア教育や、児童生徒のキャリア学習に関する実践事例は、地域の多くの学校で十分に取り組まれているとはいえない、または事例がほとんど報告されない傾向にあると思われる。大学授業で活用可能な実践事例が、ほとんどないのである。

こうした実態から、現在では、本科目を通じた（あるいは契機とした）、地域の学校でのキャリア教育実践の蓄積を構想するようになっている。事例がないのであれば自分たちで作ってみてはどうか、という発想である。本科目単独では難しいが、本科目に関心を持った受講者やゼミ生とともに、実際の学級でキャリア教育実践を試行していくことは構想可能だろう（図１には、地域と関わりながらキャリア教育を構想しようとする受講者の存在を確認できる）。その成果を本科目に還元したいと考えている。こうした構想に賛同し、ともに探究してくれる地域の学校や教師を確保することを目下の課題である。

※以上の報告内容は、筆者が 2017 年度に作成したティーチング・ポートフォリオの内容を部分的に抜粋し、加除修正したものである。

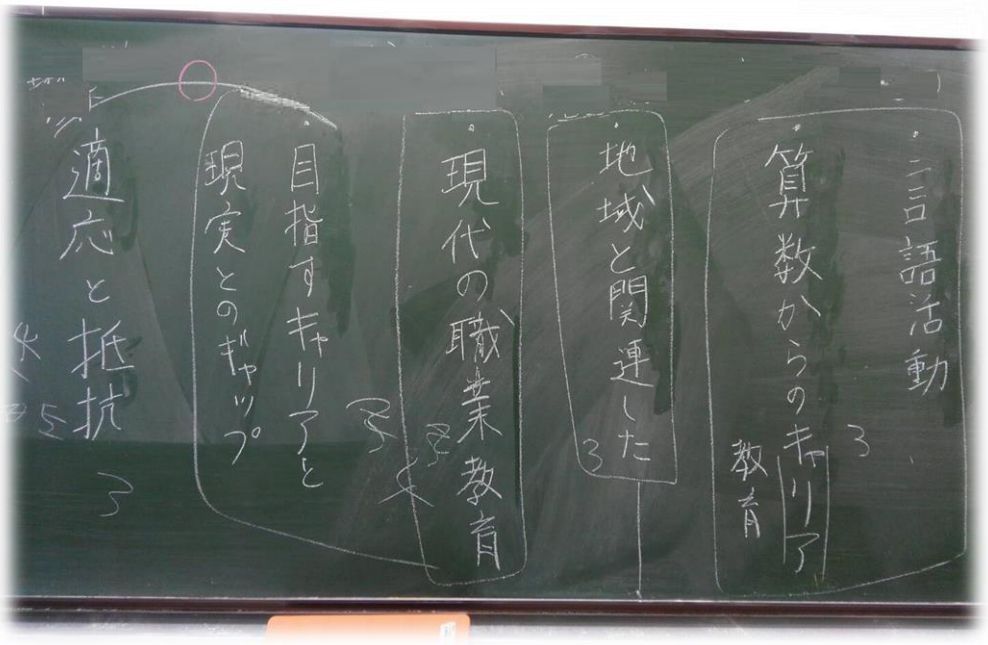

図１　2017 年度「キャリア形成支援の教育臨床学」受講学生による教育プログラム開発テーマ